

河野仁昭著

## 『四季派の軌跡』

長年にわたる著者の「四季」派（及びその周辺）研究のまとめである。

巻頭に、「四季」派の抒情」と「日本浪漫派」と「四季」との二論文が総論として置かれ、その後、詳細な各論として堀辰雄論・三好達治論・伊東静雄論が据えられている。堀辰雄・三好達治・丸山薫・立原道造・大木実・白井喜之介・萩原朔太郎・伊藤整をめぐる、やや随筆調のものをも含めた小論文がそれに続いて、全体は三部構成となっている。

論及された詩人たちに関心を抱く者にとっては無論、一九三十四・四十年代に興味を持つ者にとっても、この書は必読の書である。

更に、西洋と伝統と、という日本近代文学を貫く問題を考えようとする者にとっても、これは一読の要があろう。総論としての巻頭二つの論文が、とりわけそうである。

例えば、第一論文で著者は、三好達治・丸山薫・立原道造らの詩業を辿りながら、述べる。常に世界の文学に目を向けていた堀辰雄によって、「四季」は産み落とされた。そこに集った

詩人たちは多く、モダニズムによって詩に開眼した人々だった。にもかかわらず、彼らは内なる伝統的要素を否定しようとはしていなかった。そして、「伝統的なるものへの復帰」が声高く叫ばれた一九三〇年代に、彼ら「四季」に拠った詩人たちは、「西欧現代詩に学んだ技法や詩的センスを、あるいは詩的感受性を失うことなく、それをわが国の伝統がもつ技法や抒情のうちに活かす」という仕事をしていく。著者は、それを悪気流の中で一杯の「伝統の变革」として評価する。

「その伝統的側面と变革の側面」と副題されているこの第一論文は、著者の次のような確信で結ばれている。「伝統に埋没してしまふ危険性と、糸の切れた凧か打上げ花火のようなはない創造性に終る危険性」に抗し、「伝統の真の実体を見据え、それとの緊張関係を維持しぬいた詩人や芸術家が、真の継承者ともなり变革者ともなり得たのではないか。」

「一九三十年代における文学の側面」と副題された第二論文では、「日本浪漫派」と「四季」派との際立った対照と、一方での盛んな交流、そしてそこから「四季」派が被った影響が述べられている。

声高なグループ「日本浪漫派」とは全く対照的に、「四季」は「文学の純粹さをそと守ろうとする、いわば守勢の姿勢」

ではじめられた。その誌面も「政治や社会などの外的思想的現実の状況がならん反映していな」いものでもあった。ところが、この対照的な二グループ間に盛んな交流が始まる。そこに、筆者は、萩原朔太郎の存在と共に、神保光太郎の果たした役割を大きく認める。この「日本浪漫派」同人の感性はもともと「土俗的あるいは土着的な生活者としての詩的感性」であり、「日本浪漫派」本流よりはむしろ、「四季」派詩人のそれに近かった。神保光太郎の「四季」加入、二グループ間の交流の拡大、更には「四季」の誌面そのものの変質へと事態は進んでいく。モダニズムをくぐってこなかった神保光太郎の世界は、やはり「四季」派詩人のそれとは異質のものだったからであり、しかも、時代の深まりと共に、神保光太郎の「四季」での比重が重くなっていったからである。そして、この二グループ間の交流の動きの中で、最も劇甚な影響を被った詩人としての立原道造の軌跡が、精密に辿られる。

「詩人の全集を買ったのも、立原道造のものが最初」だと言う著者の、立原道造に対する眼には熱がこもっており、個別詩人論の中でも、三好達治論と共に、立原道造論には、一際、力が込められている。

個別詩人論として多くの誌人が論ぜられているが、総じて、

著者の「四季」派（及びその周辺）の詩人たちにそそぐ眼差しは、無類にあたたかい。その事は、三好達治の軌跡についての、例えば戦中派・吉本隆明、戦後派・鶴岡善久の見解と、著者のそれとを讀みくらべてみればわかるだろう。

著者のそのあたかい視線は、作品を孤立したものとして見ない。詩人の実生活をとらえ、「時代的思想的状况」を見、「伝統との緊張関係」を測定しながら、著者はいつも作品を見る。

「戦中世代でもなければ戦後世代でもない」、詩人である著者によって書かれた、スケールの大きなユニークな論集、それが本書である。

（白川書院刊。昭和五三年三月一〇日発行／B6判、三二二頁／一四〇〇円）  
（岸 健治）

△紹介△

『民間伝承集成 語り部の記録』

監修 土橋 寛  
編集 広川勝美

『1 民話 山峡の炉辺』

この書は同志社大学の「伝承と文芸・つちくれの会」調査報

告として誕生した。採訪は主として、長野県下伊那郡の村々でおこなわれ、土橋・広川教授の指導の下に、若き研究者によって民話論が展開されている。

民話ブームと言われる昨今、数多くのこの種の書が出版されるが、この一冊ほど土の香豊かな民話を収め、その上に立つて精緻な民話論が展開されているものは稀ではなからうか。書を繙くうち、清内路村の語り婆さ桜井小菊氏によって語られた昔ガタリには圧倒されてしまった。小菊さんの口をついて出るものには、村落共同体の中で民話が生き生きと機能していた頃の姿をそのままに伝えているように思えるのであった。このようなよき伝承者を見つけ出し、昔ガタリを引き出し得たことは、会員の丹念な採訪の賜物であつたらう。

最初は土橋教授の「羽衣と草履」で、「天人女房」譚の衣裳を「隠す」というモチーフの由来が考証されている。これは「水辺で娘たちがタマフリとしてこの水浴をしている時、その衣裳を若者たちが取って隠す習俗があつて、若者たちはそれぞれ自分が取つた着物の持主である娘と夫婦になるのが神の意志だとする。盲目的抽出による神判婚習俗に由来するものではないか」というユニークな仮説を呈示されて、民話研究の一方法を示唆されている。序章「民話の基層―カタリとハナシ」は、

広川教授の担当になり、民話は本質的に夜の闇に属するものと規定され、「夜の暗闇の喚起する想像力」の産物であり、炬ばたがその語りの場にふさわしく、ここでの夜語りこそが民話の口承性を支え、その生命を持続させてきたのであつたと述べておられる。また民話は共同体において伝承されていることで生命も持続でき、語り出される世界は共同体の共有する想像力によるものであり、想像力が形成した民話は伝承社会のムレの紐帯にとって欠くことのできない性質を持つことになると思われている。第一章「カタリの場合―遊戯性と実用性」(山田氏担当)では、冒頭に昔ガタリの場合が喪失し、その場で息づいていくコトバが消えていくやうとしている現在、わずかに残つた語り手が昔ガタリに執着し、語り伝えたいという熱意に燃えていると採訪の体験を述べ、そうした者達の生きていく世界が清内路村であつたという。ここで小菊婆さんに会い、昔ガタリを持つ遊戯性と教訓という実用性に考えを及ぼしている。第二章「日常を超えるコトバ―昔ガタリの方法と構造」(駒木氏担当)では、昔ガタリの語り口の固定的様式とリズムが聞き手を非日常的な言語空間に引き入れる働きを持つことを述べ、カタリにはかつては必ず相槌が打たれたことから、聞き手は造型の世界に積極的に加わっていくもう一人の創造者であつたと規定し、採録し

た昔話のリズムを分析することで、相槌の位置を想像する興味深い論を展開していく。第三章「語り出されるコトバ―昔ガタリの展開」（神山氏担当）では、小菊婆さんによって語られた二通りの「食わず女房」譚を提出して、この昔ガタリが「基本的な構造と論理を固持しながら、魔性の者に打ち勝つ契機となる呪物を差し変えることによって、さまざまの行事と結びついて語られるという。カタリの空間的、地域的流動の実態を浮かびあがらせている」と考察している。第四章「世間バナシー―村人のおどろき」（塩田氏担当）ここでは、信濃の村々にかけては村人と深く関わり合っていた、狐・狸・天狗のハナシが数多く盛り込まれて、民話採集の楽しさが示されている。第五章「ムレから追われるモノ―民話のうちなる死」（広田氏担当）では、御霊信仰にかかわるものの中の、非業の死をとげた山伏の霊が自分のしゃれこうべを子供にころがされことを望んだという智里村大平霊社のカタリを、氏の説のごとく、ウマレカワリ、ウマレキヨマリという観点からみると興味深い。

以上がこの書の簡単な紹介である。前述のごとく、まず民話採集において成功した書である。その点で貴重なものである。

なお本書の章立てと執筆者は次のとおりである。

「羽衣と章履」

土橋 寛

序章	民話の基層―カタリとバナシー	広川 勝美
第一章	カタリの場―遊戯性と実用性―	山田 和人
第二章	日常を超えるコトバ―昔ガタリの方法と構造―	駒木 敏
第三章	語り出されるコトバ―昔ガタリの展開―	神山 孝一
第四章	世間バナシー―村人のおどろき―	塩田 和子
第五章	ムレから追われるモノ―民話のうちなる死―	広田 収
	特別寄稿 飯田の民話	村沢 武夫

（創世記刊、昭和五三年六月五日発行／A四判／二六八頁／  
二八〇円）  
（宮本正章）

『2 遍路 彼岸に捨てられるもの』

本書は『民間伝承集成 語り部の記録』の一冊として、同志社大学「伝承と文芸・つちくれの会」によって出版されたものである。

「つちくれの会」が、伝承と文芸とのかわりを求め続けて、現にある伝承を、自らをも伝承者（語り部）として位置づけることによって、死語としての記録に終わらせず、語り継がれてきた民衆の生の声として伝えようとするものである。本書においても、語り手の生の声を随所に採り入れ、そこを起点に問題を探り、深めている。本書の魅力も、また、この点にあるといえよう。以下にその概略を紹介する。

序章「遍路―同行二人の流民」では、「村中繁栄」と刻ま

れた一体の石仏の持つ意味をとらえようとしている。すなわち、村落共同体と遍路との接点をここに見出し、共同体の意志の結晶とも、紐帯の証しであるとも説いている。と同時に、反作用としての、共同体から排除された流民としての遍路もこのこととの関連においてとらえ、遍路の負わされた業苦が決してこの世で消え去るものではなく、従って死出の旅としての遍路という位置づけがなされると言い、これを「代受苦の旅」とすることにより、定住民たちが施物をする根拠としているのである。

第Ⅰ章「遍路するものたち——めぐるということ」では、遍路の出発が「捨往來手形」の示すごとく、共同体からの永却の追放という村落維持の危機の犠牲にあるとしている。ここに遍路への定住者の賤視と聖視も根ざしているのであり、非定住を強制されたムレとしての遍路との葛藤や相克、拒否や相互依存もくり拡げられると述べている。

第Ⅱ章「遍路と大師——番外札所の語り」では、遍路開祖とされ、聖なるものに対する徹底的な反逆者である衛門三郎の絵解きを伝える文珠院を中心に、「同行二人」という遍路の始原と、その本質を説き明かそうとするものである。

第Ⅲ章「接待する論理——聖視と賤視」では、序章で位置づけられている代受苦者としての遍路の姿を、その終局の路傍死

をめぐつてとらえている。遍路墓、遍路小屋、遍路宿などの具體的な形としてあらわれる定住者の遍路への対応の仕方を見ることよって検証せんとするものである。

第Ⅳ章「遍路の行——生きながらえる苦行」では、「捨身の行」としての遍路を凄惨な祈願の表わされている絵馬より説くうとしている。或は苦行である逆打ちの道を選ぶことにより、救済への熱い願望が叶えられるという例を示し、遍路の装束の持つ意味と、接待する側の論理とを解明している。

第Ⅴ章「札所と遍路道——苦行の証し」では、遍路における苦行を札所の存在する位置が難所であるという点においてとらえ、補陀落渡海や山中他界という種々様々な仏の靈験と結びついていき、それが遍路の証しともされて、大師講が広く民間に浸透していった根拠を示している。

本書の最後には、高知在住の作家である土佐文雄氏による「四国遍路考」も特別寄稿として載せている。「人類はもともと漂泊者の群れであつて、その「原型の一つ」が四国遍路であると説き、遍路誕生の原型から現況までを概観されている。

そして遍路のもたらした文化の一つである石灰の製法と、逆に遍路が出身の村へ四国の文化を伝えた例の一として釣針製法を挙げられて、「人間どんな逆境のなかにも互に助け合

えは何かを生み創り出すことに気付かされるのである」と結ばれている。

遍路はかつての遺風ではない。しかもそれは、語り継がれることでしか伝えられなかった人々の苦悩を現在も語り伝えて在るのである。本書が遍路を単なる仏教信仰の一形態として眺めるのではなく、村落共同体とのかかわりにおいてとらえようとする姿勢は特筆すべきことである。ただ、そのことのあまり、自らの意志で遍路となる者たちの意識を深く掘り下げられていない点が惜しまれる。本書の副題が「彼岸に捨てられるもの」となって捨身の行、贖罪の行為と説かれている点の深まりは、本シリーズが逐次刊行されていく中で明らかにされていくものなのであろう。

なお本書の章立てと執筆者は次のとおりである。

「お遍路さん」

- 序章 遍路―同行二人の流民―
- 第一章 遍路するものたち―めぐるということ―
- 第二章 遍路と大師―番外札所の語り―
- 第三章 接待する論理―聖視と賤視―
- 第四章 遍路の行―生きながらえる苦行―
- 第五章 札所と遍路道―苦行の証し―

- 土橋 寛
- 広川 勝美
- 谷口 広之
- 大塚 実
- 久保田孝夫
- 谷口 広之
- 谷口 広之
- 久保田孝夫
- 谷口 広之
- 土佐 文雄

特別寄稿 四国遍路考

（創世記刊、昭和五三年六月三〇日発行／A四判／二六七頁／二八〇〇円）  
（星田公一）

『3 わらべ唄―遊びと唱え言』

わらべ唄を採集記録した資料もふえてきた。行智『童謡集』、玉晃『尾張童遊集』など江戸期のすぐれた覚書から、明治以後の、『日本民謡大全』、『日本伝承童謡集成』などの全国的蒐集、『気仙沼地方童謡民謡集』、『江沼郡手毬唄集』など一地方の集中的調査にいたるまで、しかも郡町村誌・民俗関係雑誌の報告をも揃い上げ通覧することを怠らねば、現今、資料の点で満足とまではゆかぬとしても、研究上おおいに困難と不便を感じることはすでになくなっている。

その上に立って、わらべ唄の研究もぼつぼつ行なわれている。自己の詩的感受性やイメージの中へわらべ唄を取り入れ、その美しさやあどけなさを言う詩人の評語集は別として、国文学歌謡研究の一環としての歌詞考証・継承分布・文芸作品とのかかわりの考察をはじめとして、民俗学（口承文芸）的研究や音楽側からの取り扱いなど、けっして数は多くないが、その研究は着実に積み重ねられつつある。そのような現状のなかで、やや見方をかえた清新な発表も望まれるのであった。

そうしたなか、昭和五十三年・秋、土橋寛博士監修・広川勝

美氏編集『民間伝承集成―語り部の記録』の三巻として『わらべうた―遊びと唱え言』が出た。わらべうた及びその地盤としての民俗の採集地を、長野県下伊那郡の清内路他三箇所と飯田市とに決め、調べあげた多くのわらべうたと牧内武司氏『下伊那郷土民謡集』其の他の資料を補助として、わらべうたの実体に瑞々しく切り込んだ。こころみとして地域を一つに定め、対象の地盤のぬくもりを捉え、民俗社会学的な方法論とでも言えるような視点も有効に利用して論をなしているわけで、一つの新風として注目すべきものである。全体の構成は次のようになっている。

序章 わらべうたの周辺―その虚像と実像（担当・広川勝 美氏）

第一章 わらべ唄の文化圏―伝承社会のハレとケ（担当・駒

木敏氏）

第二章 コトバとウター―わらべ唄の詞章と旋律（担当・橋本

昌代氏）

第三章 わらべ唄の原型―遊びのコトバと呪術のコトバ（担

当・塩田和子氏）

第四章 遊戯唄―うごきのリズム・コトバのリズム（担当・

山海正恵氏）

第五章 子守唄―実用性と抒情性（担当・今井昌子氏）

特別寄稿 伊那谷の手毬唄（牧岡武司氏）

から成る。

第一章では、子供達の村落共同体としての大人の生活や労働にも参入してゆく一面を見ながら、遊びや行事の中で、ウタを転用し変容させて、自分達のウタとして、自由自在に取り入れてゆく様子を追う。第二章では、わらべうたのリズム・旋律にも注意しながら、わらべうたの中の特に唱え言をとりあげ、そこに見える遊びと呪術を教える。一例として「イボイボうつれ、はしのまんなかからおっちゃん」にふれ我々を領かせる。第三章では、Ⅱ章をうけて、遊びコトバと呪術コトバの一連をとりあげ、わらべうたの原型に迫る。「まじない唄―実効をめざすコトバ」の項の神隠しの子供を尋ね出す「人さがし唄」、スバコを治療する唱え言など、注目すべき資料である。第四章では、手鞠歌・お手玉歌などの遊び歌がとりあげられ、動作とリズムの実態が解説され、かかれた土俗信仰の意味あいにもふれる。問題は、労働・舞踊と歌謡の關係に発展できよう。第五章では、子守歌の二面、子供を寝させ遊ばせる機能と、子守自身の望郷・諦め・抵抗の抒情とを、土地の子守の思い出話をお

りまぜて考察する。

それぞれ、村の生活の中に、そして子供達の集団の中に、わらべうたがどのように生きてきたかを、若々しい筆致で述べている。地盤としての民俗の考察を大切に、集団や呪術に大きな関心がかかわれている。土橋寛博士の場と機能を見据える歌謡論がみごとに生かされていると言えようか。文芸の発生という点でも参考になる標分が多い。一面では、資料的により詳細な説明が望ましいところも見うけられるが、かつてのわらべうたの研究に欠けていた、特に遊戯と唱え言における考察が添加され、今後のわらべうた研究に多くの示唆を与え、問題意識を呼びさます刺激性を内蔵している書であると思われる。出版の意義は大きい。

なお本書の章立てと執筆者は次のとおりである。

「わらべ唄と大人のうた」

序章 わらべ唄の周辺―その虚像と実像―

第一章 わらべ唄の文化圏―伝承社会のハレとケ―

第二章 コトバとウタ―わらべ唄の詞章と旋律―

第三章 わらべ唄の原型―遊びのコトバと呪術のコトバ―

第四章 遊戯唄―うごぎのリズム・コトバのリズム―

第五章 子守唄―実用性と抒情性―

特別寄稿 伊那谷の手毬唄

土橋 寛	土橋 寛
広川 勝美	廣川 勝美
駒木 敏	駒木 敏
橋本 昌代	橋本 昌代
塩田 和子	塩田 和子
山海 正恵	山海 正恵
今井 昌子	今井 昌子
牧内 武司	牧内 武司